



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

2020年7月26日 年間第17主日A年

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：列王記上3章5、7-12節

第二朗読：ローマの信徒への手紙 8章28-30節

福音朗読：マタイによる福音書13章44-52節

## 今日のテーマ：<sup>にちじょう</sup> <sup>せいかつ</sup> <sup>なか</sup> <sup>はたら</sup> 日常の生活の中に働かれる

第一朗読で主なる神は「何事でも願うがよい」(5節)とソロモンに語りかけます。神さまに向かって何を願ってもかまわないのです。ソロモンの答えは、過去の出来事への感謝(6節)、現在の自分の課題(7-8節)、欠乏の表明(9節)、そして未来への希望(9節)で構成されています。そして「聞き分ける心をお与えください」(9節)と願います。ソロモンがなによりも願ったのは「正しく聞き分ける知恵」(11節)でした。

第二朗読では、「万事が益となるように共に働く」(28節)とあります。「益となるよう」は直訳すると「よいことのために」となります。つまり、日常のありとあらゆることが、神さまがご準備して下さっている救いという「よいことのために」共に働くのです。このようにして神は日常の出来事を通じて配慮して下さいます。なぜなら、わたしたちは、「御計画に従って召された者たち」(28節)とあるように、あらかじめ神の愛によって選ばれ、義とされるように召されているからです(30節参照)。

福音朗読では三つのたとえが読まれますが、どれもがお弟子さんたちにとっては日

常の出来事でした(畑<sup>さが</sup>、探し<sup>もと</sup>求める商人、魚<sup>あみ</sup>でいっぱい<sup>あみ</sup>の網)。先週の福音朗読にあったからし種<sup>だね</sup>のたとえもパン種<sup>どうよう</sup>のたとえも同様です。「何事でも願<sup>よ</sup>うがよい」と呼びかける神さまは、日常生活の出来事の中に働かれるのです。そういった日常での神さまの配慮<sup>はいりよ</sup>に気がついた人は、まさに「天<sup>てん</sup>の国<sup>くに</sup>」の始まり<sup>はじ</sup>をそこに見出す<sup>みいだ</sup>のです。その人は天の国の弟子、すなわち学者となれます。しかし、そのためにはソロモンが願<sup>ひつよう</sup>ったように「聞き分ける心」、すなわち神からの知恵が必要となります。

今日の聖句：

「天<sup>てん</sup>の国<sup>くに</sup>は次<sup>つぎ</sup>のようにたとえられる……」

直接<sup>ちよくせつ</sup>に訳<sup>やく</sup>してみると「天<sup>てん</sup>の国<sup>くに</sup>は[次<sup>つぎ</sup>のようなものに]似<sup>に</sup>ている……」となります。イエスさまはガリラヤの素朴<sup>そぼく</sup>で無学<sup>むがく</sup>な人々<sup>わ</sup>にも分かるように、日常の出来事になぞらえて「天<sup>てん</sup>の国<sup>くに</sup>」のお話をしました。それを聞いた人々にとっては、律法<sup>りっぽう</sup>学者<sup>がくしや</sup>たちの難<sup>むずか</sup>しい話<sup>わ</sup>しとは違<sup>ちが</sup>う、自分<sup>ぢが</sup>たちに根<sup>ね</sup>ざしたもの(からし種<sup>だね</sup>、パン種<sup>どうよう</sup>、畑<sup>たから</sup>の中の宝<sup>こうか</sup>、高価<sup>こうか</sup>な真珠<sup>しんじゆ</sup>)を探し求める商人、魚<sup>あみ</sup>でいっぱい<sup>あみ</sup>の網)で天の国のイメージを豊<sup>ゆた</sup>かにしていったと思います。さらに、「天の国のことを学<sup>まな</sup>んだ学者は皆、自分<sup>くら</sup>の倉<sup>あたら</sup>から新<sup>ふる</sup>しいものと古いものを取り出す一家の主人に似ている」(52節)とイエスさまは仰<sup>おほ</sup>せになりますから、人々はユダヤ教の「古<sup>でんとう</sup>い」伝統<sup>でんとう</sup>とは全<sup>まった</sup>く異<sup>こと</sup>なるイエスさまの「新<sup>おし</sup>しい」教<sup>ふ</sup>えに触<sup>ふ</sup>れていきました。そんな人々のことをイエスさまは、自分<sup>ぢが</sup>たちこそ律法<sup>りっぽう</sup>の「学<sup>まな</sup>者<sup>ぶ</sup>」だと自負<sup>じふ</sup>する律法学者<sup>りっぽうがくしや</sup>に對抗<sup>たいこう</sup>して、「天の国のことを学<sup>まな</sup>んだ学<sup>まな</sup>者<sup>ぶ</sup>」と呼<sup>よ</sup>んだのです。このような学<sup>まな</sup>者は、天の国の弟子<sup>でし</sup>となった人です。天の国から学<sup>まな</sup>び、天の国に仕<sup>つか</sup>えます。律法学者のように律法という文字<sup>もじ</sup>に学<sup>まな</sup>び、先生<sup>ちが</sup>に仕<sup>つか</sup>えるのとは違<sup>ちが</sup>います。またこのような学<sup>まな</sup>者は天の国が地上<sup>はたら</sup>で生き生きと働<sup>し</sup>くのを知<sup>し</sup>っていますから、日常の生活、世界の出来事の中に秘<sup>ひ</sup>められた神さまの想<sup>おも</sup>いを引<sup>ひ</sup>き出<sup>だ</sup>すことができるのです。「聞き分ける心」を持<sup>も</sup>ち合<sup>あ</sup>わせているのです。

実は、イエスさまご自身が、あらゆる出来事の中から神さまの想<sup>おも</sup>いを引<sup>ひ</sup>き出<sup>だ</sup>すことのできた天の国の弟子となった「学<sup>まな</sup>者<sup>ぶ</sup>」だったのです。